



作者

大黒達也

人喰い小鬼

妖魔に寝取られし美人妻の末路

『あらすじ』

魔界から現れた小鬼しょうきに突然襲われ、性交奴隷にされる美人妻。何度も犯され、その凄まじい性技により、肉体はおろか精神まで貪り尽くされる。夫も小鬼により囚われ、妻が凌辱される様を見せ付けられる。経済的にも恵まれ、何不自由のない夫婦が、突然、地獄に突き落とされる。

『登場人物』

小鬼しょうき

身長百三十センチ、体重三十キロの小柄な体躯でありながら成人男性の十倍以上の怪力の持ち主。残虐な性格であり、美女が大好物である。美しい女をしたい放題に凌辱し、最後にはその肉体を貪り喰らう。

黒澤美咲 くろさわ みさき

美しく清楚な顔立ちの美人妻。年齢二十四歳。雪のように白い素肌を持ち、身長百七十センチの長身でスタイル抜群である。その美貌のために魔物である小鬼に狙われ、娼婦にされてしまう。

黒澤 浩司 くろさわ こうじ

美咲の夫であり、売れっ子の小説家である。年齢は五十四歳。小鬼に最愛の妻を寝取られる。

『目次』

プロローグ

第一章 食られる美人妻

第二章 美女狩り

第三章 人肉喰らい

第四章 寝取られ美人妻

第五章 反撃

エピローグ

『本編』

プロローグ

郊外にある黒澤邸では、主である黒澤浩二と妻の美咲が、入浴と食事を終え、リビングで寛いでいた。時刻は午後十時を少し過ぎた頃だった。屋外では、台風の接近で暴風が荒れ狂い、雷鳴が轟いていた。

「ワイン。もう一杯飲む？」

ネグリジェ姿の美咲が、甘えた声で聴いた。透けて見える白い素肌が、まるで雪のように美しかった。

「そうだな」

黒澤は三十歳も年下の美咲を溺愛していた。美咲は男女を問わず魅了してしまうほどの美貌の持ち主だった。結婚してから二年になる。女子大を卒業したばかりの美咲と偶然知り合い、半ば強引に妻とした。当時、付き合っていた男がいたが、黒澤は金の力を使い、ありとあらゆる手段でその男から奪い去っていた。

黒澤は、ワインボトルを取りに行く美咲の後姿

を満足げに見詰めていた。足が長く腰の位置が驚く程に高かった。Tバックのパンティからはみ出した尻は、適度に大きく柔らかそうだった。

美咲がキッチンに行つてすぐに家のチャイムが鳴った。

「貴方。大変よ」

美咲が慌てた様子でリビングに戻つて来た。

「誰か来たようだな」

「インターホンで見たわ。小さな子供と犬が映っていたの」

「子供？こんな夜更けにおかしいな」

黒澤は不安な表情を浮かべ、立ち上がろうとした。

「私が見て来るわ。子供しかいないから安心して」
美咲は黒澤を置いて、部屋を出て行った。

「坊や。こんな夜遅くにどうしたの？」

美咲は、ガウンを羽織りドアのロックを解除し、

ドアを開けた。夜遅くではあるが、嵐の中ほおっておくことはできなかった。

広大な玄関の隅に帽子をかぶった幼稚園児くらいに見える子供が、向こう側を向いてしゃがみ込んでいた。近くには、狼に似た巨大な犬が、蹲っていた。犬の巨大さに少し怯えを感じたが、勇気を出して子供に近付いた。

「あんた。いいオツパイしているな」

「誰なの？」

しわがれた男の声だった。美咲は慌てて周囲を見渡した。子供と犬以外誰もいなかった。

子供がゆっくりと美咲の方に振り返った。

「……」

美咲は恐怖のあまり、絶句した。叫び出そうにも声すら出なかった。

子供の顔ではなかった。皺だらけの顔でまるで老人のようだった。切れ長の一重瞼に大きな鉤鼻で鋭い犬歯が口元からはみ出していた。

「尻を出せ」

老人の顔をした子供がゆっくりと近付いて来る。

美咲の呪縛が解けた。

「貴方。助けて！」

美咲の叫び声は雷鳴にかき消された。助けを呼びながら、玄関に飛び込んで後ろ手でドアを閉めた。鍵をかけようとした時、凄まじい力でドアを開け放たれた。

「キヤー」

背中に何かが張り付いた。振り剥がそうとしたが、できなかつた。背後から不気味な笑い声が聞こえて来た。美咲は危うく失禁しそうになった。

「美咲。どうしたんだ？」

黒澤は中々戻って来ない美咲のことが心配になり、玄関に向かった。

「貴方……助けて」

「お……お前何しているんだ！」

玄関では、全裸姿の美咲が、うつ伏せに倒れていた。帽子をかぶった幼稚園児くらいの子供が美咲の白い尻に顔を押し付けアヌスを舐っていた。



浩二は、子供の襟首を掴み、美咲から子供を引き剥がそうとした。

「うざいオッサンだな」

子供が美咲の尻を舐めたまま、片手で黒澤の腕を振り払った。衝撃で黒澤の身体は跳ね飛ばされ床を転がった。衝撃で少しの間、意識を失っていた。その間、魔物のような小男に美咲はアヌスを貪られていた。

夫にも加えられたことのない強烈な愛撫だった。内臓を舌でえぐり取られるような凄まじい快感に鋭い喘ぎ声を発し、白い背筋を震わせ絶頂に達した。

悪魔のような小男がゆっくりと立ち上がった。蛇のように長い舌が、美咲のアヌスから引き抜かれ、口内に収まった。

壁に凭るようにして、茫然とした表情で座っていた黒澤に近付き、おもむろな感じで往復ビンタを加えた。黒澤の顔面が裂け、血が噴き出した。黒澤の顔面は、すぐに試合後のボクサーのようになつた。

小男は、黒澤が意識を失ったところで殴るのを止めた。玄関の床でうつ伏せになり、半ば意識を失っている美咲のところに戻った。履いていたズボンを脱いだ。下着は履いていなかった。

信じられぬほどの巨根が剥き出しとなった。長さは五十センチ、太さが五センチほどで、皮膚の表面には複数のイボができていた。美咲の腰を軽々と持ち上げ、背後から膣に挿入した。

「嫌！そんなことしないで」

巨大な男根で刺し貫かれ、膣口が大きく膨れ上がった。表面に硬いイボができた男根で膣壁を擦られた。これまで感じたことのない快感に襲われていた。何が何だか分からなくなっていた。



自分より遙かに小さな男に犯され、髪を振り乱し、白い裸身を震わせ喘ぎ続けた。

悪魔のような顔をした小男は、淫らな笑みを浮かべながら激しく腰を前後させた。

美咲は一気に絶頂に達した。鋭い喘ぎ声を上げながら、床に突っ伏した。

「女よ。気持ちよかったか？」

耳元で囁かれた。

「はい……とても良かったです……」

そう答えるしか無かった、この悪魔のような男に何をされるか分からなかった。

「名前は何という？」

「美咲。黒澤美咲といいます」

「そこに倒れているのがお前の旦那か？」

「はい。浩二という名前です」

「素直でいい女だ。気に入ったぞ。当分は生かしておいてやる」

次の瞬間、再びアヌスに舌を差し込まれた。

「あああ……」

美咲はあまりの快感に意識を失った。小男は、

美咲の裸身を片手で抱き上げ、空いている方の手で、黒澤の襟首を掴み、引きずるようにしてリビングに消えた。

第一章 貪られる美人妻

三十分後、リビングでは、フローリングの床に美咲と黒澤が全裸で正座していた。その前には、小男が一人掛けのソファに深々と座り、足を組んで赤ワインを飲んでいた。小男は帽子を脱いでいた。頭部には短い角のような物が一本生えていた。

「俺様は小鬼だ。見てのとおり、人間ではない。魔界からやって来た。今日からお前達は俺の僕になった。俺様のことは、これから小鬼様と呼べ。美咲は俺の性交奴隷にする。黒澤、お前は雑用係だ。それから、お前達の携帯は預かった。家電も線を抜いたから何処にも通じないぞ」

「……」

黒澤は、一瞬、恨みの籠った視線を向け俯いた。

これは悪夢だと思いたかった。突然、魔物が家に

やって来て二人を奴隷だと宣言したのだ。

「お前は、まだわかっていないようだな？」

小鬼はワイングラスをソファテーブルの上に置いて立ち上がった。

黒澤の前に立ち、頬を殴りつけた。衝撃で前歯が一本吹き飛んだ。横倒しに倒れた黒澤の上に馬乗りとなり、往復ビンタを加えた。小鬼の平手が当たる度に口元から鮮血が吹きだした。

美咲は、その横で涙を浮かべ、震え戦っていた。数発程度に留め、黒澤から離れた。美咲の前に仁王立ちとなり、ズボンを下げた。

表面にいくつものイボができた巨根が天を突き上げた。

「舐めろ」

美咲は逆らわなかった。恐る恐る巨大な男根に手を添えて、鬼頭をゆっくりと舐め始めた。

「中々上手いぞ。どうだ？俺のチ*ポの味は？」

「お……美味しいです」

一旦、口から男根を吐き出し。蚊の鳴くように言った。正直なところ、小鬼への恐怖の為か味は

あまり分からなかった。

「そうだろう。こいつで犯られたら、女は狂うんだ」

その隣では、顔中傷だらけの黒澤が、床に横たわったまま、ふたりの様子を陰惨な表情で見詰めていた。愛する妻が化け物の汚い男根を舐めているのだ。とても耐えられるものでは無かった。

黒澤は目を閉じた。

「誰が目を閉じていいと行った。ちゃんと見ろ！」

小鬼が美咲の髪を掴み、男根の先端を口に含ませ、腰をゆつくりと前後させながら命じた。

黒澤は荒い息を吐きながら何とか正座し、二人の痴態を見詰めた。愛する妻の口腔性交を見ながら、不覚にも勃起した。慌てて両手で押えつけた。

「お前。女房が犯されるのを見て興奮しているのか？手を離して見せてみる！」

黒澤は己が男根から手を離した。また、殴られるのは心底嫌だった。押えつけていた男根が限界まで勃起した。

「美咲。見てみる。お前の旦那はチ＊ポおっ立て

ているぞ」

美咲が黒澤の方をちらりと見た。瞳には侮蔑の光が見えた。

小鬼は、美咲の肩を軽く蹴った。仰向けに倒れ、床に頭部を強打する寸前に小鬼が、美咲の頭部を抱え、唇を奪った。美咲は固まっていた。抵抗することなどできなかった。小鬼の好きなように舌を与えた。小鬼は、美咲の舌を存分に吸った。次に白く形の良い乳房を口に含み、乳首を舌先で転がした。美咲が低い喘ぎ声を漏らした。

その後は、クリトリスと膣口を激しく舐られた。美咲の息が荒くなってきた。

目を閉じて、魔物のざらついた舌を受け入れていた。

黒澤は魔物に愛撫を加えられ、快感に身を悶えさせる美咲のことが信じられなかった。

少し前までは、自分の愛撫に悶えていた裸身が、今は魔物のものになっていた。

「あああ……いい。逝っちゃう！」

イボだらけの巨大な男根が、美咲の膣に差し込

まれた。美咲はあられもない声を出しながら、小鬼の尻を両手で押さえながら、腰を上下させていた。

小鬼は美咲の膣を犯しながら、口を開けた。口内から蛇のような長い舌が出て来て、美咲のアヌスに侵入して行く。

「あああ……いい。死んじゃうよ……」

イボ付きの巨根で膣壁を、ざらついた舌で直腸を刺激され、これまで感じたことのない快感の波に襲われていた。意識が飛びそうなほどだった。

小鬼が自分より長身の美咲を貫いたまま立ち上がった。太腿を両腕で支え、腰を上下させた。舌先はアヌスの中で暴れていた。美咲は、小鬼に抱かれながら前後の穴を犯され、鋭い喘ぎ声を上げた。

「逝く！逝っちゃう！」

美咲は余りの快感に全身を震わせ絶頂に達した。それでも小鬼は美咲を解放しなかった。

床にうつ伏せにさせて、背後からアヌスに男根を突き入れた。

「い……痛い！」

直腸の中でイボつきの男根が暴れていた。これまで感じたことのない感覚だった。激痛は薄れ、代わりに疼くような快感が襲って来た。あつという間に逝かされ、白い背筋を仰げ反らさせた。

小鬼も低い呻き語を上げて、美咲の直腸内に大量の精液を放出させた。

美咲は半ば意識を失い、床に横たわった。口を開いたアヌスから大量の精液が流れ出した。

「黒澤。こっちに来て美咲の肛門を舌できれいにするんだ！」

小鬼が、床に座り自慰をしていた黒澤に命じた。

黒澤は、最初意味がわからなかった。射精しながらぼんやりと小鬼の顔を見た。

「何をしている！早く、美咲の肛門を舐めてきれいにしろ！ぶっ殺されたいのか！」

小鬼が怒声を発し、拳を振り上げた。黒澤ははっとした表情で起き上り、美咲の元に移動した。

目の前に美咲のアヌスが見えた。ぽっかりと穴が開き、白濁した精液が周囲にこびりついていた。

黒澤は吐き気を必死に押さえながら、アヌス周囲の精液を舐めとった。便が混じっているようで苦みがあった。精液を舐めるのは初めての経験だった。小鬼に殺されないために必死に舐めた。

「お前は、今日から俺の精液処理係だ」

背後から、小鬼の高笑いが聞こえて来た。黒澤は嗚咽を漏らしながら、美咲の汚れたアヌスを舐めた。

第二章 美女狩り

数時間後、小鬼は、一人掛けのソファに腰かけながら、赤ワインを飲み、テレビを見ていた。膝の上には美咲をうつ伏せに抱き、白い尻を撫で摩っていた。美咲は犯された余韻から覚めておらず、ぼんやりとした表情で小鬼に裸身を預けていた。「狩りに行ってくる。ゾロ、こいつらを見張っている。美咲を犯ってもいいぞ」

小鬼は、近くで腹這いになっていた狼犬の頭を撫でた。

「お前達。逃げ出そうなんて気は起こすなよ。ゾロに喰い殺されるぞ」

小鬼は鼻歌を歌いながら部屋を出て行った。

「美咲。大丈夫か？」

黒澤は、床に座ったまま美咲に声をかけた。

「何で助けてくれなかったの？」

美咲は恨みのこもった目で黒澤を見詰めた。

「助けたかったさ。でも彼奴は物凄い怪力の持ち主なんだよ。化け物さ」

「意気地なし。私が犯されているのを見て興奮し

ていたくせに」

「済まん。でも奴には敵わないんだ」

その時、狼犬のゾロが低い唸り声を上げ、二人を交互に見た。

「もう話しかけないで。犬に喰い殺されたくはないわ」

それまで腹這いになっていたゾロが立ち上がり、美咲に近い付いた。

「お願い。来ないで……」

恐怖で顔が蒼白になった。ゾロは、美咲の豊かな白い乳房を舐めた。美咲の白い背筋が震え戦っていた。ゾロが美咲の背後に回り、鼻で背中をを押しした。美咲は床に腹ばいになった。

ゾロが美咲の白い尻の割れ目に鼻先を入れ、臍口やアヌスを舐め始めた。

「お願い。そんなこと止めて……」

美咲は泣き喚いた。ゾロの意図は明らかだった。獣に犯される恐怖で気が狂いそうになっていた。

ゾロは構わず、執拗に舐めた。美咲の泣き声がいつしか、喘ぎ声に変わった。ゾロの舌で逝かさ

れそうにそうになっていた。

ゾロが美咲の尻を軽く噛んで、低い唸り声を上げた。美咲はゾロの意図を理解した。ノロノロといった感じで四つん奪いになった。ゾロが美咲の背中に乗ってきた。巨大な男根が、膣に挿入された。

「あああ……」

美咲は訳がわからなくなっていた。既に人生を諦めていた。魔物に逝かされ、獣に犯され快感に身を悶えさせているのだ。ゾロは美咲の白い尻に腰を何度も打ちつけた。数十秒後、美咲は膣内に精液が迸るのを感じた。

「逝く……逝っちゃう！」

美咲は鋭い喘ぎ声を上げて、床に突っ伏した。

深夜一時過ぎ、都内の女子大に通う太田理沙は、自宅近くの生活道路を歩いていた。バイト蹴りに友人と落ち合い、駅近くの居酒屋で少し前まで酒を飲んでいった。

家まで二百メートルのところ、不意な感じで胸騒ぎを感じた。誰かに見られているような不気味な気配を感じた。

振り返ると、小さな男の子が路肩でしゃがみ込んでいた。理由はわからないが、泣いているようだった。

「どうしたの？坊や」

こんな夜中に子供ひとりでいることが不思議だったが、声をかけずにいられなかった。

何も答えない子供に近づき、肩に触った。その瞬間、腹部に衝撃を感じ、意識が遠のいた。

子供に化けていた小鬼が、意識を失った理沙を抱き上げ、近くの民家に侵入した。その家は留守のようで誰もいなかった。

目覚めると、広さ十畳程の部屋に置かれたダブルベッドに全裸で横たえられていた。

下半身に異物感を覚えた。何者かが理沙の膣口を舐めていた。声を上げようとしたが、猿轡を嵌められており、呻き声しか出なかった。後ろ手に

縛られており、手で押し退けることもできなかった。理沙の視線を感じてか、臍口を舐めていた者が顔を上げた。

頭部に二本の短い角のようなものが生えていた。切れ長の目は赤く爛々と輝き、口元から鋭い犬歯が飛び出していた。それはまるで悪鬼のような顔だった。理沙は恐怖の余り失禁した。

その男は、理沙の股間から迸る小水を口で受けた。喉を鳴らして飲み込んだ。

「俺は小鬼様だ。お前のマ*コも小便も美味いぞ。まだ、あまり使っていないようだな」

「……」

震え戦く理沙をうつ伏せにして、むき卵のようにスベスベで白い尻に顔を埋め、アヌスに蛇のような舌を進入させた。直腸内をざらついた舌が蠢いていた。

理沙はおぞましきの余り、身悶えした。まともな人間には思えなかった。死の恐怖に打ちひしがれた。初めは苦痛だったアヌスへの愛撫も次第に快感へと変わっていった。

理沙はいっししか、快感の波に呑み込まれ喘ぎ声をあげ続けた。

絶頂に達する寸前で不意な感じでアヌスから舌を抜かれた。

恐る恐る振り返った。背後に身長百三十センチくらいで小鬼と名乗った小男が立っていた。その時、理沙は、声を掛けた子供の正体を悟った。小鬼はパンツを履いているだけだった。痩せ型ではあるが、筋肉は恐ろしいまでに引き締まっていた。

小鬼は淫らかな笑みを浮かべながら、パンツを脱いだ。表面に無数の大きなイボができた巨大な男根が天を突いていた。長さは五十センチほどで太さは五センチくらいはあった。見たことのない巨根だった。視線を逸らすことができなかった。

小鬼が理沙を四つん這いにさせた。腰を両手で掴み、ゆっくりと膣口に挿入してきた。

あまりに大きすぎてすぐには入らなかった。膣を破壊される恐怖に理沙は髪を振り乱し、嗚咽にむせいだ。

巨大な男根は何とか収まった。表面のイボが膣

壁を擦り、凄まじいまでの快感に襲われた。瞳だけではなく、アヌスにも舌が侵入してきた。舌と男根が薄皮を隔てて擦り合った。

あまりの快感に理沙は白目をむいて失神した。

その後、小鬼は意識を失った理沙を何度も犯した。最後には、膣内に大量の精液を放出した。

小鬼は、理沙の裸身をバスルームで洗い清めてから、ベッドに紐で縛り付け、一旦家を出た。

その足で、閉店したスーパーに窓から侵入し、監視カメラを避けながら店内の物色を始めた。

店内は非常灯のみで薄暗かったが、夜目が利く小鬼にとって何の問題も無かった。

買い物カートを押し、メロンやリンゴ等様々な果物を籠に入れてゆく。もちろん小鬼は果物には興味が無かった。美咲の餌にするつもりだった。

果物のみを与え肉質を高めるつもりだ。最後に美咲の白い裸身を捌いて食べるつもりだった。

肉の味を想像しながら大量の涎を垂らした。

それから買い物籠を追加し、アルコールコーナで大量のウィスキーや赤ワインを盗んだ。

「帰ったぞ！狩りは成功だ。旨そうな雌一匹だ」

小鬼が意気揚々とリビングに入って来た。自分より大きな麻袋を背負っていた。

美咲を犯していた狼犬のゾロが、美咲から離れて、小鬼の足元に移動した。

「どうだった？美咲のマ*コは？」

ゾロの頭を撫でてから、床に麻袋を置いた。麻袋の口を開け、中から全裸の若い女を引き出した。

小鬼に拉致された女子大生の理沙だった。理沙は猿轡を嵌められ、後ろ手にロープで縛られていた。小鬼に何度も逝かされ、意識が朦朧としているようだった。

「美咲。お前には美味しい食べ物を持って来たぞ」

小鬼は、麻袋から、マンゴーやパイナップル等の大量の果物を取り出した。美咲はゾロに何度も逝かされ、半ば意識を失っていた。

黒澤は床に座り、ウイスキーをボトルで飲んで
いた。

「誰が飲んでいいとிட்டんだ！」

小鬼がボトルを奪い、ラッパ飲みで一気に飲み
干した。

「手前は最低のカス男だ。カミさんが、ゾロに犯
されているのを見てマスかいていやがったろ
う？」

空いたボトルで殴りつけようとして、寸前で止
めた。

「まだ、生かしておいてやる。雑用係は必要だか
らな。お前。あの女を風呂場で洗ってこい。浣腸
して腸の中を綺麗にするのを忘れるなよ」

「何のためだ？」

黒澤が泥酔した顔で小鬼を見上げた。

「喰うに決まってるだろう。何なら殺す前に犯し
てもいいぞ。美咲は絶対に抱かせないが、どうせ
喰う女だから、お前の好きにしたらいい。それか
ら俺達は寝室で休むことにする。終わったら連れ

て来い」

黒澤がノロノロと立ち上がり、理沙を立ち上げ
らせて隣接するバスルームに連れて行った。

ゾロが後に着いて来て、二人がバスルームに入
るのを確認してから、戸口の前に腹ばいになった。

第三章 人肉喰らい

「お願い。助けて下さい」

バスルームでは、全裸の理沙が、床に土下座をして黒澤に懇願していた。黒澤も衣服を脱いで全裸になり風呂椅子に座っていた。

「俺だって助けたいさ。でもできないんだ。そんなことをしたら奴に鬻り殺されるんだよ」

「私をどうするつもりなのですか？」

「俺にもよくわからないんだ。喰うとか言っていたが」

「食べる？私をですか？」

「見ての通り、彼奴は人間ではない。まだ、信じられないが魔物だ。人肉が好物というのは嘘ではないだろう」

「お願い！助けて」

理沙は、黒澤にしがみ付いた。股間に顔を近づけ、半勃起した男根を咥えた。何としても助かりたかった。黒澤の脳裏には、妻の美咲が小鬼に犯される光景が脳裏を過った。男根が美咲の口内で勃起した。

「そこに四つん這いになれ」

もうどうでも良かった。この女が小鬼に喰い殺されるのは明らかだった。

理沙は素直に従った。黒澤の眼前に美しい白い尻が据えられた。シャワーの湯で理沙の股間を丹念に洗ってから、膣口に口を付けて舌を這わせた。若い女の素晴らしい味がした。

理沙の白い尻が無残に震え戦っていた。

黒澤には理沙の気持ち痛みほどわかっていた。自分もいつ小鬼に罫り殺しにされるかわからなかった。

膣口の味を存分に味わってから、アヌスを舌につけた。理沙の白い背筋が震え戦いた。

黒澤は理沙のアヌスを舌でこじ開けたかった。激しい勢いでアヌスを舐めた。理沙の喘ぎ声が次第に大きくなっていく。最後には鋭い喘ぎ声を上げて絶頂に達し、床に突っ伏した。

それでも黒澤は、理沙のアヌスを狂ったように舐り続けた。

「お願い。少し休ませて……」

理沙は弱弱しい声で懇願したが、耳を貸さなかった。いきなり理沙の腰を持ち上げ、一気に怒張した男根を膣口に突き入れた。その後、黒澤は理沙が意識を失うまで膣とアヌスを交互に何度も犯した。

意識を失った理沙のアヌスにシャワーヘッドを外したホースの先端を差し込み浣腸を行った。

それは排泄物がなくなるまで続けられた。仕上げに全身を液体ソープとシャワーで洗い清めた。

黒澤は意識を失った理沙を両腕に抱き、二階の寝室に向かった。ゾロが背後についてきた。

寝室では、一人掛けのソファに小鬼が腰かけていた。全裸の美咲を膝の上うつ伏せにさせて、アヌスに蛇のような舌を挿入して、部屋に備え付けの大型プロジェクトでアダルトビデオを見ていた。

足元には、ワインやウイスキーの空き瓶が転がっていた。美咲は余程気持ちがいいのか、美尻を

震わせながら鋭い喘ぎ声を上げ続けていた。

「随分、時間がかかったな？楽しんだか？」

小鬼が淫らかな笑みを浮かべ、黒澤を手招きした。美咲のアヌスから舌を抜いて、黒澤に抱かれた理沙のアヌスに挿入し、すぐにまた抜いた。

「合格だ。飯にしよう。お前も喰え」

小鬼は、何度も逝かされ意識が朦朧とする美咲を広大なダブルベッドの上に横たえた。

「見張っている」

狼犬のゾロに命じてから、理沙を抱いた黒澤を引き連れ一階キッチンに向かった。

ゾロがベッドの上に飛び上がり、美咲の膣口とアヌスを舐め始めた。美咲はされるがままにゾロの舌を受け入れていた。

ゾロは暫く、膣口とアヌスを味わってから、鼻先で脇腹を軽く突き、四つん這いの姿勢になるように促した。美咲は、それまで舌で何度も逝かされ、茫然とした表情でベッドの上に四つん這いとなった。ゾロが美咲の白い尻に腰を押しつけるよ

うにして膾口に怒張した男根を挿入した。
寝室に美咲の喘ぎ声が響き渡った。美咲の心は、
狼犬のゾロにさえも支配されていた。

キッチンでは、全裸の理沙がテーブルの上に仰
向けの姿勢で横たえられていた。黒澤は小鬼の命
令で、包丁を砥石で研がされていた。

少し前に意識が戻っていた。黒澤にバスルーム
で散々に犯された余韻が残っていた。

「理沙。俺達はこれからお前の肉で宴会を開くこ
とにする」

椅子に座った小鬼が耳元で理沙に伝えた。

「お願い。殺さないで下さい……」

理沙は泣きながら懇願した。

「死にたくないのか？」

「何でもします。お願いです」

「そうか？ではここで自慰を試してみろ。俺を満足
させられたら考えてもいいぞ」

「本当ですか？」

「俺は残虐だが、嘘は嫌いだ」

理沙はその一言に縋った。この若さで死にたくはなかった。目を閉じて、両手をクリトリスと膣口に当てて、ゆっくりとなぞり始めた。意識を指先だけに集中した。膣口に人差し指を入れ、もう一方の手でクリトリスを軽く刺激した。

小鬼は、赤ワインをグラスで飲みながら、空いている方の手で巨大なイボつきの男根を摩っていた。血走った両目は、理沙の指先に向けられていた。

徐々に理沙の息が荒くなっていく。理沙は乳房を片手で揉みながら、クリトリスを刺激した。腰を淫らに動かし始めた。最後には鋭い喘ぎ声を発し、背筋を仰げ反らせるようにして果てた。

「ブラボー」

小鬼は両手を叩いて、高らかな笑い声を上げた。

「お願い。殺さないで」

理沙が息を荒げ、再び懇願した。

「残念だけど。それは無理だな」

「騙したのね？」

「俺は言ったろう。俺を満足させたら考えると、もうちよつとだったな」

小鬼が狡猾な笑みを浮かべ、理沙の白い太腿を掴んだ。小鬼は、理沙の肉体だけではなく精神まで貪ろうとしていた。

小鬼は両手で、理沙の頭部と乳房を押さえ、首筋に口を付けた。次の瞬間、柔肌を鋭い牙で噛み裂いた。鮮血が吹き出し小鬼の顔を真っ赤に染めた。理沙は低い呻き声を上げながら手足をばたかせた。小鬼は喉を鳴らしながら、流れ出る鮮血を美味そうに飲み込んでいく。

理沙の動きが緩慢になり、やがて動かなくなつた。両目を見開き絶命していた。

「若い女の生き血は最高に美味いぜ。黒澤。つつ立っていないで包丁を寄越せ」

黒澤はテーブルの近くで、絶命した理沙の裸身を見下ろしていた。顔面は蒼白で、手足が微かに震えていた。手にしていた刺身包丁を小鬼に手渡した。

小鬼は刺身包丁で理沙の腹部を縦に大きく切り

裂いた。色とりどりの内臓を手掴みで取り出し、生のまま喰らい始めた。

「うっめーぞ！最高だぜ。女の肝は」

鮮血が付いた口元を手の甲で拭った。それから、理沙の腹腔に手を入れ、心臓を掴み出し、テーブルの上に置いてあったボールに入れた。

「ゾロの餌だ。冷蔵庫に入れておけ」

小鬼がボールを黒澤に手渡した。黒澤は強烈な吐き気を抑えながら、サララップで蓋をして冷蔵庫に入れた。吐いたりしたら小鬼に何をされるか分からなかった。

狩猟が趣味ではあり、獲物の解体は行っていたが、人間の臓器を見るのは初めてのことだった。

小鬼は、内臓を抜いた理沙の死体をうつ伏せにさせ、盛り上がった白い尻に刺身包丁を差し込み、肉を切り取っていた。食べやすい大きさに成型し、生のまま食べるように食べた。

黒澤は椅子に座り、テーブルの上に置かれたス

ステーキ皿をじっと見ていた。皿の上には、血の滴る様なステーキが載せられていた。理沙の尻肉を調理したものだ。味付けは塩、胡椒のみだ。

小鬼に命じられ作ったものだ。小鬼から食べるように命じられていた。その小鬼は、反対側の椅子に座り、刺身包丁で理沙の太腿から生肉を削ぎ取り、生のまま貪り喰らっていた。

既に十キロ近くは食べた筈だ。小鬼の腹が大きく膨れ上がっていた。里奈の尻肉と太腿肉は粗方食べられ、白い骨が露出されていた。

「どうした？美味いぞ。早く喰え。喰わないと叩き殺すぞ」

小鬼なら本当に殺すだろう。まだ、死にたくはなかった。それに理沙を殺したのは小鬼だ。

黒澤は自分に言い聞かせるようにして、ナイフとフォークを手にした。理沙の尻肉ステーキをナイフで切り、フォークに刺して口の近くまで持つていった。

異臭などはしなかった。焼肉の香ばしい匂いがあるだけだ。意を決して肉を口に入れた。肉汁が

口内に広がった。味は悪くはない。いや、脂が載って美味しいかも知れない。風味が豚肉に似ていた。

尻肉を咀嚼しながら、理沙の顔を見た。理沙はテーブルにうつ伏せに横たわり、顔は黒澤の方を向いていた。見開かれた両目で黒澤を見ているように感じた。

自分の肉は美味しいかと問いかけてきているようだ。

一口食べたら、止まらなくなった。

「どうだ？中々いけるだろう？」

「……こんな肉は食べたことがない」

独り言のように言った。

第四章
寝取られ美人妻
へと続く